

# 『枕草子』「頭の弁の、職に参りたまひて」の指導

—— 作品理解を通して自らの言語生活を振り返る ——

黒瀬直美

## 一 はじめに

シラバス、学校評価、国公立合格者数、授業アンケート、自己申告書、模擬試験の学校間比較……。私自身が教員になった頃には想像もできないあらゆるシステムが次々と導入され、高校現場は多忙を極め、指導者は授業研究に取り組む時間をどんどん吸い取られていく。そればかりでなく、授業の進度を統一し、共通テストによってシラバス通りの評価を行い、週末には週末課題、授業ごとの小テスト、未提出者の追指導、進学実績を上げるための指導に追われ、結果として、授業そのものの存在が圧迫され、本来のあり方を見失っているように思える。

私が思う本来のあり方とは、自ら課題を発見し、授業者と生徒、生徒同士が対話する中で、課題を解決し、新しい気付きや発見をもとに、自分自身の認識を深めていくというものである。それが今、できていない。特に古典、とりわけ古文の授業では、学校の実態にもよるだろうが、文語文法の習得に追われ、品詞分解によって現代

語訳をするということが中心の、いわば訓詁注釈主義的、指導者主導の授業がメインになっているというのが現実ではないだろうか。そうならざるを得ない原因は、生徒の実態を考えると、現代語訳にたどり着くまでに多くの時間を要してしまい、その後の展開にける時間がないというのが大きい。また逆に現代語訳をコンパクトにしようとして、生徒の理解が追いついてこないという実態もある。そして自己批判的に言うなら、現代語訳に終始するだけで満足してしまっている指導者側の意識の低さもあるだろう。

指導者は無意識的に自ら受けてきた授業の影響を受けている。私自身は訓詁注釈主義的な授業を受けておらず、どちらかという課題解決型の授業を受けてきて、またそのような志を抱いて教壇に立ったはずだ。しかし今や、「授業というサービスの内容統一」という制約に阻まれ、時間のなさを嘆き、現代語訳で終わらせてしまいうかない現実に関々としていく日々である。

今回の研究発表では、そのような息苦しい日々の中で、何とか生徒の認識を深め、生徒の今後の生き方に影響を与えるような古典の授業ができないものかと考え、取り組んだものである。

## 二 指導上の課題

本校の生徒は学力的にはごく平均的である。現代文の学力は平均よりやや上であるが、運動系のクラブ活動が活発であり、生徒の八割が運動系のクラブに入っているため、家庭学習の時間が短く、高校に入って積み上げる必要のある、古文、漢文の学力は平均以下である。体力に任せて試験前に暗記して得点を取る生徒が多く、授業でも原因や結果を考えて理解しようという姿勢があまり見られず、覚えてなんとなかるといふ妙な自信のため、論理的思考力に乏しい感がある。

一方、性格的には素直で明るく、前向きで、何事にも一生懸命に取り組もうとする。クラブ活動で疲れ切ってはいるが、授業をおろそかにするような生徒は少ない。従って、授業はきわめて「平和」である。

古文に関しては一年生の頃から週末課題で文法を継続的に指導し、定期テストごとに合格ラインを決めて追試や補充指導を行っている。しかし、前述したように直前に記憶してクリアしているため、文法的な理解も積み上がっておらず、また現代語訳する力もすぐには身につかず、何度も何度も同じ指導を授業で繰り返して定着させ、三年生に上がる頃にはどうか簡単な文の現代語訳ならできるといふ程度である。

読解力の面では、想像力や思考力に乏しいため、登場人物を生きて生きと想像できなかつたり、話の筋を全体的に把握できなかつたり

と、「その場しのぎ」の習性が抜け切れておらず、構造的、総合的にとらえ、分析して自分なりの見解を述べるというレベルには到達していない。

以上のようなことから、生徒には基本的な文法事項を踏まえて、正確に現代語訳できる力と、現代語訳を元に、作者や人物の気持ちや想像したり、話の展開を見通しながら理解する力、内容を理解した上で自ら考えたことを表現する力を身につけさせることが大きな課題であると考えた。

## 三 指導の実際

### (1) 学習者と実践時期、時間数

- ・ 広島県立広島観音高等学校 三年生文系 五単位
- ・ L1群 二十七名 (男子五名、女子二十二名)
- ・ 平成二十五年 一学期九時間

### (2) 教材と教材観

#### ①教材 『枕草子』 「頭の弁の、職に参りたまひて」

〔精選 古典 改訂版〕大修館書店

#### ②教材観

この章段は、定番というほどではないが、高校三年対象として教科書に採録されている。百人一首の「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世に逢坂の関は許さじ」という有名な清少納言の歌が登場する回想的章段であるが、高校生にふさわしいかどうかとなると、非

常に難しい教材ではないだろうか。

清少納言が同時の貴族の男性と知的なやりとりをするのだから、宮廷生活のイメージや時代背景というバックグラウンドなしには理解できない作品である。そもそも、中期にさしかかっているであろう清少納言や、主要登場人物である藤原行成の男女の知的やりとりなど、まだ初々しい青年期の高校生に理解できるかといえ、それは非常に難しいだろう。しかし、故事を踏まえた機転を利かせた返答や、思わせぶりの受け答えの応酬、自分の本音をあらわにはしない婉曲な表現など、現代の高校生にとっては別世界であるが、古典の世界では、言葉のやりとりが奥深いものであったこと、時間や空間を越えて相手に伝えなければならぬ「手紙」という形式であるがゆえに知恵を絞って伝えようとしていることなど、言葉を大事にしながら生きてきた当時の人々の姿に触れることを通して、自らの言語生活を振り返るきっかけとすることができれば、生徒にとって意義深い教材になりはしないか、と考えた。

『枕草子』は感性豊かな清少納言の簡潔で鋭い表現を味わうものだとしたり、中宮定子サロンをアピールするためのプロバガンダであるところとえたり、さまざまであろうが、清少納言が描いた人々の姿や風物の切り取り方は現代の我々にも強い印象を残すものである。それだけ我々の生き方や暮らしを豊かにする力を持っている作品なのである。

### (3) 指導目標

① 助動詞、助詞、敬語などを中心に文章を読み取る力を付けさせ

る。

② 登場人物の行動、会話の意味を理解し、登場人物を生き生きと想像させる。

③ 枕草子の人物と現代の自分たちの言語生活を比較し、考えを深め、自分なりの意見を持たせる。

④ グループで話し合ったり、発表し、感想を述べ合ったりすることで、話す力を付けさせるとともに、様々なものの見方、考え方に触れさせる。

### (4) 指導過程

#### ① 一時間目

『枕草子』について、作品のあらましを確認。学習の前半と後半にシナリオを書いて、演じてもらうことを予告。文章を音読。予習プリント(資料①参照)を配布し、前後半に分けて、前半を個人で予習。

#### ② 二時間目

各自の予習を元に前半部分の現代語訳の確認。

#### ③ 三時間目

前時の続きの現代語訳を行う。前半部分のシナリオを書かせる。

#### ④ 四時間目

二名のシナリオ(資料②参照)を指導者が選んで印刷し、配布。その後配役を指名して、シナリオを読ませる。その後、感想を述べ合う。前半部分について、発問をしながら内容理解を深めさせる。

#### ⑤五時間目

後半部分についてグループ（四、五人）ごと現代語訳の担当箇所を決め、後半部分の超訳（＝意識をさらに推し進め、訳文の正確さを犠牲にしても読みやすさ・分かりやすさを優先させる翻訳手法。ときには大幅な原文の省略を行うことさえある。アカデミー出版の登録商標。）を手がかりに、グループで現代語訳に取り組ませる。余った時間は各自で後半部分全体を予習。

#### ⑥六時間目

グループごとに現代語訳を発表。質問を受け付けて、答えさせる。内容について、発問をしながら、理解を深めさせる。

#### ⑦七時間目

前時の続きを行う。後半部分のシナリオを書かせる。

#### ⑧八時間目

後半部分の二名のシナリオを指導者が選んで印刷し、配布。その後配役を指名して、シナリオを読ませる。その後、感想を述べ合う。学習のまとめとして課題作文（当時の男女間のやりとりと自分たち高校生世代の男女のやりとりの違いについて気付きや感想をまとめよう）を書かせる。（資料③参照）

#### ⑨九時間目

クラスのすべての作文を印刷した作品集を読み、印象に残ったもの、考えを深めさせてくれたものについて五、六人に発表させる。学習後のアンケートを記入させる。宿題で問題演習プリントを配布。

## 四 成果と課題

以下、指導目標に照らし合わせて考察する。

①助動詞、助詞、敬語などを中心に文章を読み取る力を付けさせる。

授業をしたクラスは文系の中でも国立大学進学希望クラスであるが、予想通り予習は難航したようだ。授業後のアンケートでは、予習の時点では「助動詞の意味を判断するのに苦労した。」「和歌の解釈に苦労した。」「訳はできたけど内容がつかめない。」「などの感想が多い。「詳しくわからなくても、文の雰囲気から助動詞の意味を当てはめたりして一文を完成させる力が付いたと思います。」というコメントも見られ、わからなくても文脈を補いながら自分で推測してみるなど、さすがに三年生である。難しかったのは、職、殿上人、御物忌み、孟嘗君の故事、逢坂の関などであった。これらは適宜プリントや説明を入れていった。予習を元に現代語訳を確認していく作業を通して、生徒は予習段階での問題意識をもとに理解を深めていった。

余談であるが、私自身は、このような逐語訳の授業は受けていない。しかし自分が授業をする側になって初めて、一つ一つの助動詞の意味、言葉の意味をじっくりと考えて、文章に寄り添うように訳すことによって、より深く内容を理解でき、また文章を綴っている

人の息づかいのようなものも感じられ、一概に訓詁注釈主義というのも否定できないのではないかと思うようになった。(逆に言えば、もつと逐語訳寄りの授業を受けたかったとも思う。)

後半部分のグループ学習では、超訳を与えたため、だいたいのアウトラインはわかった上での現代語訳であった。超訳を与えたのは、全くのヒントなしではとても生徒たちだけで訳せないと思ったからである。しかしながら、生徒はグループで力を合わせて何とか自立して現代語訳ができるようになって欲しいと思いい、超訳を与えてみることにした。超訳では助動詞の意味や語句の意味をはしょって現代語訳をしているところもあり、それを補うのは少し骨が折れたようだ。グループで現代語訳をする作業は、「人に教えてもらった、教えたりすることで理解を深めることができました。」「自分とは違った意見を聞くことで自分の間違いに気づけたし、いろんな視点から作品を読むことができて楽しかった。」「意見が互いに違うときに説明して解決できるのが良いと思う。」「グループ学習だと普段より意見が言いやすいし、何より自分以外の人がどういう予習をしているか知ることができてとても参考になりました。」など、グループ学習は主体的に取り組む姿勢を養うことができたといえよう。

普段の授業でも、逐語訳をかなり丁寧にやっている。時間を取られて内容理解を深める時間がなくなってしまうが、ここをおろそかにするとたちまち理解のレベルが低くなってしまい、その後の発展学習がお粗末になってしまうことは何度も苦い経験をしている。どうしても手を抜きたくない作業をどう楽しみながらさせるか、という工夫の一つが超訳付きグループ学習であるが、今回は時間の短縮

にはなったようだ。今後も試行錯誤を繰り返してみたい。

②登場人物の行動、会話の意味を理解し、登場人物を生き生きと想像させる。

今回は前半、後半の二回に分けてシナリオを書かせたが、書いたものは、ほとんどの生徒が現代語訳をちよつとアレンジしただけに過ぎず、期待外れとなった。(それでも各回二名の生徒が、自己流のアレンジを考えてシナリオを完成させた。)登場人物を生き生きとイメージできて、それを自分の言葉として変換する力も必要で、生徒には難しかったようだ。生徒のアンケートでも二十七人中、二十四人は「苦労した。」「難しかった。」「大変だった。」「どう表現して良いかわからなかった。」と回答している。

実際にアレンジがうまくできている生徒の作品を見せて演じてもらうと、「現代風にくだけた言い方で会話しているのを聞くと、本文のニュアンスが伝わってきて、なるほどと思った。」「固い考えしか浮かばなかったためもう少し柔軟に考えていきたい。」「言いたいことは同じでも、言葉が違うとわかりやすさも違うとおもった。」「こんな風に書けるのは本人がよく理解しているからだと思う。だから自分ももつと理解できるようにがんばろうと思った。」という感想だった。友人の作品に刺激を受けて、理解が深まったといえる。

しかし、生徒自身が一人の読み手として想像力を養い、それを表現するには日頃からの練習の積み重ねが必要だろう。自らの授業でもつと日常的に取り入れる必要を感じた。

③枕草子の人物と現代の自分たちの言語生活を比較し、考えを深め、自分なりの意見を持たせる。

今回の目標で最も大切にしたかった部分である。既存の現代語訳を読んだだけの上っ面の理解でなく、自分たちで一語一語丁寧に言葉にこだわり、文脈を考え、人物の気持ちを想像するという積み重ねの上に、平安時代の宮廷生活での男女のやりとりはどうか映ったのだろうか。

生徒の感想は資料⑦⑧⑨に掲載しているので目を通していただきたい。まずは何もかも違っていることに素直に驚いている。そして自分たちの言語生活に携帯電話（スマホ）が大きく影響しているということを書いている生徒が多い。同年代の生徒同士の間で、電子機器を介してのやりとりが奥深く浸透し、いまや不可欠といっているほどであるということを実感させられた。生徒はそのことをはっきりと自覚し、自分たちの言語生活を「軽い」といい、作品中のやりとりを「いろいろ考えないといけない」「新鮮だ」「教養が必要だ」「手紙だからこそ思いが伝わる」と捉えているようである。

学習後のアンケートでは「手紙を書くことの良さを改めて感じる事ができました。また当時と今とを比べてみて時代の進化にびっくりしました。」「時代が変われば文化も個人もすごい変わると思っています。」「自分の頭の中を整理することができた。」「昔と今の男女間のやりとりの違いについて改めて考えてみることで、二つの違いの大きさが改めて再認識された気がした。自分のこれからの男女間のやりとりにも昔っぽく知的な内容を入れようかなと思った。」「一、二

年のころはこんなに深く内容を理解していなかったもので、まとめを書いてあらためて深く理解することができた。」というものがあつた。当初懸念したとおり、世界が違いすぎて高校生には難しい教材であつたが、逆手に取れば、その違いによってより今の自分の生活が浮かび上がるといふことになるのではという目的は達成することができたように思う。

特に男女間の知的なやりとり、遠回しな表現ということがしつかり理解できているのは、シナリオ化して想像を広げてきたからであり、その背景には逐語訳という確かな作業があつたからではないか。普段当たり障りのないような無難な文章を書く傾向の生徒が多いのであるが、大げさな表現やユーモア、脱線などがあり、楽しんで書いていたことから生徒がこの課題に主体的に取り組み、自分の意見を出そうとした現れではないかと思つている。

今後は、現代文を重ねて読ませ、さらに認識を深める方法が考えられるだろう。ネット社会において、言葉の力がどう変化しているのかに切り込んだ評論文を読ませるから、課題文を書かせた方が、もっと生徒の思考の幅を広げたのではないか。

④グループで話し合ったり、発表し、感想を述べ合ったりすることで、話す力を付けさせるとともに、様々なものの見方、考え方に触れさせる。

とにかくこのクラスの生徒はおとなしく、発表も小声で単語の切れ端しか言わず、長い文章はしゃべらないので当初は大変だった。

できるだけ授業中に意見を言わせ、しっかりと褒めてどんどん考えを言うように仕向けていった。また少人数クラスで人間関係ができていくこともあって、次第に授業中に発言するようになった。

グループで現代語訳を発表するときは、各グループの発表後に質問コーナーを設け、他のグループからの質問を受け付けるということもやったが、質問は出ず、もっぱら授業者からの質問に答えるというパターンになった。もつと質問できる力、問いを立てる力を普段から意識して育てていく必要がある。話し合いをより活発で有意義なものにするためには必須であると感じた。

シナリオを読んだときや学習のまとめを読み合ったりした時には必ず、感想を求めた。印象に残ったもの、物の見方を深めてくれるものを選んでコメントするように注文を付け、なるべく深く考えてコメントするように気をつけさせた。

アンケートでは「自分の考えの及ばないような所もあり、みんなおもしろいところを突いているな、と思った。」「自分の思っていた違いとは別視点で書かれているものがあって感動した。自分は昔のやりとりは面倒だと思っていたけど、他の人は現代の人にはそんな押しが弱いという意見があったので、自分も押しの強い人にならないうちとと思った。」「当時の人々の手紙のやりとりを批判的に思う人もいれば、肯定的に思う人もいて、自分とは違う意見がたくさんあって考える幅が広がったと思う。」「皆心では便利な世の中になりすぎているときちんとわかっているのだなあと思った。それではいけないとわかっているも携帯は手放せません……。」というものがあつた。グループで話し合う、書いたものを共有するといった活動の有効性

を再認識した。今後も日常的に取り入れていくつもりである。

## 五 おわりに

振り返ってみれば、単元学習でもないし、系統立てた学習でもない、単なる単発の実践報告でしかないものに終わってしまった。

他の県立高校のシラバスについて、単元学習を組んだり、系統学習を計画してシラバスを作っているという話はあまり耳にしない。それよりも、生徒に古典の文章に慣れさせ、多読させるために、教材を多く詰め込んでいるという話は聞いたことがある。質なのか、量なのかもわからなくなってきた。

しかし、現場ではそこで工夫するしかない、といった息苦しさがある。この単発の取り組みを、間隙を縫って日常的に取り入れ、つないでいくということではか、今のところ、この息苦しさを解消する手立てはないように思える。そうなれば、ある程度シラバスに課題作文を仕組んで現代文と連携させておくなどの、「プチ」単元学習という方法も可能であるはずだ。まずは「プチ」単元学習の模索をしていきたい。

生徒のアンケートの欄外に、「これからもたくさん頭を使うような授業をして下さい。」と書いた生徒がいた。生徒は「考える」授業を求めている。それに応えられる授業を作っていかなければならない。

## 六 補足

本文は第五十四回の広島大学国語教育学会の研究発表の資料をもとにしたものである。発表では、質疑応答の中で、登場人物のイラストによつて生徒が思い描く人物像が誘導されたり、限定されたりすることの危惧を指摘して頂いた。また「逢坂の歌はへされて返しもえせずなりにき。いとわろし。」の部分を清少納言のものとするのか、頭の弁のものとするのか、解釈が二つに分かれているという指摘も頂いた。今回は前者を採用して授業を行ったことも補足しておく。

(広島県立広島観音高等学校)

### 資料①

3年古典 枕草子 頭の弁の、職に参りたまひて 予置プリント①  
年 組 番号前 一

頭の弁の、職に参りたまひて、物詰などしたまひしに、

夜いたうふけぬ、逆接統制詞「あす御物忌みなるにこもるべけれ

丑になりなばあしかりなむ。」とて、参りたまひぬ。

つとめて、藏人所の紙屋敷ひき重ねて、「今日は残り多かる

心残り

心地なむする。夜と通して、昔物語も聞こえ明かさむと

逆接統制詞

せしと、鶏の声に催されてなむ。」と、いみじう言多く

書きたまへる。いとめでたし。御返りに、「いと夜深く

はべりける鳥の声は、孟嘗君のにや。」と聞こえたれば、

偶然条件

たらかへり、「孟嘗君の鶏は、西谷岡を開きて、三千の客

わづかに去れり。」とあれども、これは逢坂の岡なり。」とあ

資料②

3年古典 枕草子 頭の弁の、職に参りたまひて3年  
 ●下の空欄に内容をわかりやすく表現した台詞を入れよ。

組 番 名前一

	<p>「今日は残り多かる心地なむする。夜を通して、昔物語も聞こえ文明かきむとせしを、酒の声に催されてなむ。」</p>	<p>今日ほもと君と          誤したか、たなあ          ても鶏つ夢にせかされ          ちやうよ。</p>
	<p>「いと夜深くはべりける鳥の声は。孟嘗君のにや。」</p>	<p>えい、          鳥の声は          嘘だ、たんじ、ないの。</p>
	<p>「孟嘗君の鶴の声は函谷関を開きて、三千の客おつかに去れり。」とあれども、これは逢坂の関なり。」</p>	<p>その誤は初、てるげじや          今日僕は男女が出入る          逢坂の関のことを言てきたよ。</p>
	<p>「一夜をこめて鳥のそら首ははかるとも世に逢坂の関は許さじ心かしくき聞守はへり。」</p>	<p>ふん、そうやって          私をばまそうたて          そうばかりぢやないよ          私は優秀ですわ。</p>
	<p>「逢坂は越えやすき聞なれば鳥鳴かぬにもあけて待つつかか。」</p>	<p>そつ、逢坂は越えやすけり          関だから鳥が鳴かならぬ          聞いて待つ、そうかい、やむの          かい？ そう君の心のように、          逢坂は越えやすけり。</p>
	<p>逢坂の歌はへされて返しもえせずなりにき。いとわろし。</p>	<p>あんたに斥御されて、い、返事か          返せな、な、たあ、          みともな、い、な、あ、も、し、</p>

資料③

3年古典 頭の弁の職に参りたまひて 3年  
 ●下の空欄に内容をわかりやすく表現した台詞を入れよ。

組 番 名前一

<p>「今頃は残り多かる心地なむする。夜を通して、昔物語も聞こえ文明かきむとせしを、酒の声に催されてなむ。」</p>	<p>「いと夜深くはべりける鳥の声は。孟嘗君のにや。」</p>	<p>「孟嘗君の鶴の声は函谷関を開きて、三千の客おつかに去れり。」とあれども、これは逢坂の関なり。」</p>	<p>「一夜をこめて鳥のそら首ははかるとも世に逢坂の関は許さじ心かしくき聞守はへり。」</p>	<p>「逢坂は越えやすき聞なれば鳥鳴かぬにもあけて待つつかか。」</p>	<p>逢坂の歌はへされて返しもえせずなりにき。いとわろし。</p>
<p>今日ほもと君と          誤したか、たなあ          ても鶏つ夢にせかされ          ちやうよ。</p>	<p>えい、          鳥の声は          嘘だ、たんじ、ないの。</p>	<p>その誤は初、てるげじや          今日僕は男女が出入る          逢坂の関のことを言てきたよ。</p>	<p>ふん、そうやって          私をばまそうたて          そうばかりぢやないよ          私は優秀ですわ。</p>	<p>そつ、逢坂は越えやすけり          関だから鳥が鳴かならぬ          聞いて待つ、そうかい、やむの          かい？ そう君の心のように、          逢坂は越えやすけり。</p>	<p>あんたに斥御されて、い、返事か          返せな、な、たあ、          みともな、い、な、あ、も、し、</p>